田村のつぶやき　第９号

2023.9.11 発行　　文責：島根県立江津高等学校長　田村康雄

Being、Doing、Having

Being、Doing、Having という言葉を知っていますか？

Being：「あり方」「存在」「自分がどうありたいか」「何を大事にして生きたいか」
Doing：「行い」「行動」「やりたいこと」「自分は何をしたいのか」
Having：「持ち物」「所有」「具体的に何が得たいか」「何を手に入れたいか」

コーチングやカウンセリングなど、コミュニケーションスキルを学ぶ場では、「Being（あり方）」や「Doing（やり方）」といった言葉が出てきます。そして、「やり方」（Doing）より「あり方」（Being）の方が大切だといわれます。

生徒のみなさんにあてはめて考えてみると、Being は、自分自身が大切にしている価値観や信念、自らのあり方・生き方、もう少し具体的には将来の進路目標と言ってもよいかもしれません。そのために何をするのか（Doing）、そのために何が必要か（Having）。これまでは、何を持っているか、いわば知識の量（Having）を求められていました。もちろん、基礎・基本となる知識は必要です。しかしネット社会になり、知識はネットで検索すれば、簡単に手に入れることができる時代になりました。もちろんネット上の情報が全て正しいとは限りません。フェイクニュースに騙されず、その真偽を見極める情報リテラシーをきちんと身につけることが必要です。さらにこれからは、手に入れた知識を使って思考、判断、表現する力（Doing）、さらには課題意識、主体性、人間性、感性（Being）が重要となります。別の言い方をすれば、**Having は「What」、Doing は「How」、Being は「Why」**に対応しています。大学入試等においても知識の量を問う出題から、思考力や判断力を問う出題へと大きくシフトしています。さらには推薦入試、特に総合型選抜と呼ばれる入試のウエイトが年々高まっています。何を学びたいのか、卒業後にどのような進路を目指すのか、自分が身につけた知識やスキルを社会の中でどう活かしていくのか、といった明確な志望動機・志望理由を問われます。また、高校時代に何を学び、どのような活動をしてきたのか、そのことが大学等での学びにどうつながるのか、こうした点も面接試験等で問われます。まさに「Being」を問われるのです。このことは進学試験だけでなく、就職試験においても同様です。

自分の Being が分かっていると、目標が明確なので、前に進みやすいです。Being がわかると何をすべきか（Doing）、そのために何が必要か（Having）が、自ずと分かってきます。「こうありたい」という未来の姿を描き、実現のための取り組みを逆算的に組み立てる（未来の目標から現状までの手順をバックさせる）アプローチ方法を**バックキャスティング**と言います。

江津高校では、教科の学習はもちろんですが、地域との連携による課題解決型学習、探究的な学びの機会がたくさんあります。部活動、生徒会活動、ボランティア活動等を通して得るものもたくさんあります。しかし、こうした機会が与えられるのを、ただ待っているだけでは自らの学びにつながりません。**自ら学びに向かう姿勢・学び続ける姿勢、主体性・積極性**が求められます。